

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02700

研究課題名(和文) 言語学習ポートフォリオを活用したCLTの日本への文脈化

研究課題名(英文) Contextualization of CLT to Japanese educational settings using language learning portfolio

研究代表者

清田 洋一 (Kiyota, Yoichi)

明星大学・教育学部・教授

研究者番号：60513843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、Communicative Language Teachingの促進ツールとしての言語学習ポートフォリオの開発と活用方法の研究である。「言語は使うことを通して習得するものである」という考えに立ち、自律的な外国語学習を生涯にわたり継続することを支援する言語学習ポートフォリオの開発とその活用方法の研究を行った。今回は特に、ポートフォリオ学習に適した効果的な学習活動の開発に焦点を置いた。その結果、学習者が自分の学習に意識的になることができる課題解決型のプロジェクト型学習が有効であり、たとえば協調学習やCLILなどの学習スタイルがポートフォリオ学習に有効であることが判明した。

研究成果の概要(英文)：The goal of this research is to develop a language learning portfolio and a method of its practical use as a promotion tool of Communicative Language Teaching. Based on an idea that language should be learned through using the target language, we developed a portfolio which encourages learners' independent learning. We mainly focused on developing an efficient teaching method using this portfolio as a main goal of this research. Considering points which possibly give language learners good chances to improve their learning, project-based learning is one of the appropriate methods for conducting classes using an portfolio because it can enhance learners' effective reflection of their language learning, which possibly leads to establish each learner's appropriate language learning. For examples, collaborating learning and CLIL style learning are recommended as efficient styles of project-based learning.

研究分野：英語教育

キーワード：言語学習ポートフォリオ Can-doリスト 自立的学習者 生涯学習

1. 研究開始当初の背景

1) 日本の英語教育の現状とこれまでの研究の取り組み

本来、学校の英語学習も個々の生徒のニーズや適性に還元できるものにすべきであり、そこから学習の継続性も生まれるはずである。しかし、現状は一般的に定期試験や受験のための一教科という意識が一般的で、自分のニーズに合ったコミュニケーション・ツールとしての言語学習であると意識されていない。このような状況を改善するには、学習者が学校という枠を越えた生涯学習的な観点で、自律的な学習を継続することを支援する必要がある。具体的には、自らの言語学習のニーズを把握し、それに沿った学習目標の設定とその達成度の自己評価を行う必要がある。その観点から、これまでの研究では、自律的な学習を継続することを支援する言語学習ポートフォリオの活用が有効であると考え、まず高校生を対象としたポートフォリオの開発に取り組んだ。本ポートフォリオは、「自分の興味関心と卒業後の進路から自分の英語学習へのニーズを把握する項目」、および「CAN-DO リストによる自己評価の項目」が主要な構成要素になっている。

2) 本研究の言語学習ポートフォリオのモデルと日本における実践例

ヨーロッパ各国の言語教育の改善を目指す欧州評議会は、言語学習は学習者個人の社会的な必要性和自己の責任において継続すべきものとする考え方から、『ヨーロッパ言語共通参照枠』(以降 **CEFR**) という言語教育の共通枠を開発した。さらに、この自律的な言語学習の考えを実現するために、個人的な自律的な学習の支援ツールとして『**European Language Portfolio**』(以下 **ELP**) を完成させた。この「言語学習は学習者個人の社会的な必要性和自己の責任において継続すべきもの」という **ELP** の理念が日本においても有効であると判断し、本研究の基本モデルとして参照した。また、日本でも中学から大学において **ELP** をモデルとした実践研究が取り組まれているが、**CAN-DO** リスト作成や個別の学習結果についての評価・反省が中心となっており、学年や学校を超えた個人の学習の継続という生涯教育的な視点に立った観点からの取り組みが十分とは言えない。

2. 研究の目的

今回の研究では **CLT** の促進を目指して、より効果的な言語学習ポートフォリオを開発するため、以下の3点を課題として焦点化した。

・**CAN-DO** リストの各達成目標に適した効果的な学習活動の開発
言語技能の習得を目標にした **CAN-DO** リス

トを掲げても、実際の指導が伴わなければ、「絵に描いた餅」になってしまう。そうならないためには、教師は生徒が目標を達成できる授業を提供しなければならない。言語学習ポートフォリオの活用においては、基本的には、**CLT** の方法として、言語の機能を意識した生徒自身が取り組む活動が中心となるが、一般的に対象言語の英語による実際のコミュニケーション活動を重視した授業は依然としてハードルが高い現状がある。これまでの研究の取り組みでも、**CAN-DO** リストの各達成目標に沿って、研究協力者である担当教師とともに言語活動の検討・設定を行ったが、言語学習ポートフォリオを活用した **CLT** の指導方法の普及を目指すには、多くの教師が自律的に取り組むことが可能な、より汎用性のある体系的な **CAN-DO** リストの項目設定の方法、およびそれに対応する指導方法と評価方法を開発する必要がある。

・各学校の英語教育の改善と自己評価活動の一層の充実

各学校の英語教育の改善に連動して自己評価活動への支援をさらに充実させる必要がある。これまでの取り組みの実態として、生徒の中には、学習活動によく取り組んでいるにもかかわらず、自己評価が著しく低いものが少なからずいることが判明した。このような姿勢では、自律的に自分の達成度と学習方法を検証し、改善につなげることは難しい。自己評価活動の支援方法を充実させるには、例えば、個人での自己評価活動に加えて、協同学習の観点から、相互支援的な評価活動の方法を開発する必要がある。さらに、日常的に自己のニーズを確認し、そのニーズに即した自分の学習方法の検証をより効果的に行えるようなポートフォリオ開発を行う必要がある。

・小学校、中学校、高等学校、大学、さらに社会人として継続的に活用できる言語ポートフォリオの開発

本研究の最終的な目標として、学校単位の言語学習ポートフォリオではなく、生涯学習のツールとして、広く、継続的に活用されることを目指している。つまり、日本のどの学校においても学習者個人の言語学習の継続性が保証されなければならない。そのためには、小学校から大学に至るまでの英語学習に共通する方向性と、それに基づいた指導方法を確立する必要がある。現段階で開発した高校生版のポートフォリオを、さらに発展的に他の学校種と連携させる方向で改善させる必要がある。

3. 研究の方法

1. 言語学習ポートフォリオを活用した **CLT** の指導方法の普及を目指して、より汎用性の

ある体系的な指導方法を開発する。

2. より効果的な自己評価活動の指導方法の開発

言語学習ポートフォリオを活用した、より充実した自己評価活動を支援する指導方法を開発する。具体的視点として、協同学習の観点に立った、相互支援的な評価活動を開発する。

3. 生涯学習の観点から、高校生版に連携できる中学生版の言語学習ポートフォリオを開発する。

これまで開発した高校生版の言語ポートフォリオを基に、中学生版を開発する。

4. 研究成果

今回の科研では次の3点を焦点化した。

① Can-do リストの各達成目標に適した効果的な学習活動の開発

② 各学校の英語教育の改善と自己評価活動の一層の充実

③ 小学校、中学校、高等学校、大学、さらに社会人として継続的に活用できる言語ポートフォリオの開発

上記の目標について、それぞれ成果を以下に述べる。

① Can-do リストの各達成目標に適した効果的な学習活動の開発

研究チームの現職の教師とポートフォリオを活用する場合の効果的な指導方法を開発するため、それぞれの学校の英語学習の実践的な研究を行った。その結果以下のような学習方法が効果的であることが判明した。

1. 交流型の学び

ポートフォリオは学習者の実際のニーズを確認しながら、自分の学習目的に適した学びを構築することを目的にしている。そのため、「英語を使うために学ぶ」意識を育てることが重要になる。このような将来の英語使用者を意識した学習活動においては、教室は擬似的な実社会の環境を提供する場となる。学習者は英語に関する知識や技能だけでなく、教科横断的に、それまで培ったすべての知識や判断力を総動員して、テーマに沿って設定された「実社会的な学習環境」の中で学びを構築できる。

2. 学習のプロセスの可視化

実社会において、言語活動は様々な具体的な課題と結びついている。その意味で、英語学習においても様々な具体的な課題と向き合う必要がある。例えば、中学や高校の英語の教科書が扱うテーマは、地理的な話題、環境問題、歴史的な話題、さらには人権的な話題や平和問題など多種多様である。そのテーマに関連した語彙や表現、考え方があり、言語学習はそのテーマとは切り離すことはで

きない。学習者がそれまで蓄積してきた思考力や知識を駆使して、課題に取り組み、その課題に必要な英語の表現を学ぶ時、「学習のプロセス」に意識的になることが重要であることが分かった。

学習プロセスとは、学びの始まりから、様々な学習活動を経て、学びを達成していく「学習の取り組み過程」である。学習の過程で、自分の方法や信条について問い直す機会が生まれる。このような学習のプロセスを意識できる方法として、プロジェクト型の学習がある。学習のプロセスを可視化できるという意味で、学習ポートフォリオはプロジェクト型学習と組み合わせることが重要となることが判明した。

3. プロジェクト型学習

プロジェクト型の学習は、前提として解決すべき課題があり、その基本的な流れとして、「課題の把握」→「プロジェクトの計画」→「協同学習的取り組み」→「課題の解決への提案」→「成果の確認」となり、学習プロセスが明確になる。また、それぞれの学習の段階で、取り組み方法見直し作業を伴うことから、段階毎に「考える機会」を提供することができる。

今回の実践研究では、具体的な活動例として、たとえば協調学習や CLIL などのプロジェクト型学習の方法を取り入れた実践を行った。その結果、このような学習スタイルがポートフォリオ学習に有効であることが判明した。

② 各学校の英語教育の改善と自己評価活動の一層の充実

このテーマでは、個人での自己評価活動に加えて、協同学習の観点から、相互支援的な評価活動の方法の開発をめざし、4つの高等学校と一つの中学校の取り組みにおいて、使用する教材の単元と各学期、そして年度末に自己評価活動に取り組み、異なる学習環境下においてそれぞれに適した評価活動の指導方法を開発した。4つの高等学校の違いは、英語力の習熟度や学習意欲・態度である。各学校の取り組みの状況は以下ようになる。

1. 英語の習熟度が低い学習者

実践校は中学段階で英語学習につまずいて、基礎的な英語力が十分でなく、学習に自信のない生徒が多い実態があった。そのため、英語でのコミュニケーション活動をポートフォリオの基本的な学習活動として取り組み、自己評価活動を個別ではなく協同学習的な観点から取り組んだ。結果として、「学習に取り組む生徒の姿勢の改善」と「意欲の低い生徒に対応する授業への改善」を認められた。

2. 多様な学習履歴のある学習者

実践校は外国籍の生徒も多く、多様な学習経歴を持っている生徒が多い状況があった。

学校の全体的な課題として、「学習への苦手意識や目的意識の希薄さ」が挙げられた。生徒の自己評価活動を促進させるための留意点として、「個々の教員の授業力を向上し、教科全体としての同僚性を促進する」ことを目指した。その結果、英語学習の目的意識と学習意欲の向上が認められた。

3. 進路多様校

生徒の英語力と英語学習への意欲も生徒によって大きく差が見られる高校。実践として、協調学習を導入し、授業の全体構成の改善と多様な生徒に対応できる授業内容の多面化を目標とした。その結果、英語力が多様であっても、それぞれの学習活動を充実させることができ、その結果個別の自己評価活動も改善した。

4. スーパーグローバルハイスクール

総合学科の進路多様校で、2014年に文部科学省のスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定され、2016年現在、国際バカロレア(IB)の候補校となった。英語の学習環境として、生徒の英語力と意欲は生徒によって大きく差があった。そのため、ポートフォリオの導入の目的として、生徒主体の授業に転換して、多様な生徒が英語学習の動機を持てるようになることを期待した。実際の授業方法としてCLILを活用し、課題解決型の授業を行った。その結果、それぞれの生徒が個別の目標を意識できて、主体的に学習に取り組む、自己評価活動も充実した。

5. 中学校

中学校で教科横断的な実践を行った。一例として、「職業調べ」をプロジェクトのテーマとして、自分の好きなことや興味のあることなどの「自分の傾向」について考えさせてから、職業調べのインタビュー活動を行った。活動についてまとめる際に、自分の将来と英語学習について考える機会を持てることで、それまで漠然とした振り返りが、それぞれ自分の英語学習を意識できるものに改善した。

③ 小学校、中学校、高等学校、大学、さらに社会人として継続的に活用できる言語ポートフォリオの開発

このテーマでは、今までのところ、中学校、高等学校の連携を目指したポートフォリオを開発中である。また、小学校においても、ドシエ(資料集)の「検証可能な学習証拠」という機能に注目し、lapbookという総合的なまとめの学習活動がポートフォリオの学習活動として有効なものであることが判明している。今後はこれらの観点をさらに追究して、さらにそれぞれの校種の連携を深めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計4件)

- ① 清田洋一, 「個人の文化資産としての英語学習 -学習ポートフォリオの資料集としてのLap Bookの可能性」
『Language Teacher Education Vol. 3, No. 1』 JACET 教育問題研究会会誌, 査読有 2018年3月発行
- ② 清田洋一, “Encouraging English teachers’ autonomous education”
『Language Teacher Education 言語教師教育 Vol. 3, No. 2 36-54』 発行年 2016年7月査読有り
- ③ 清田洋一, 「英語教師の自律的な省察を支援する授業改善の取り組み」
『Language Teacher Education 言語教師教育 Vol. 3, No. 1 36-54』 発行年 2016年3月, 査読有り
- ④ 清田洋一, 「英語科教科法におけるJ-POSTLの統合的な活用法-授業力への内省を高めるために-」
『Language Teacher Education 言語教師教育 Vol. 2, No. 1 36-54』 発行年 2015年3月, 査読有り

[学会発表](計8件)

- ① 清田洋一, 他5名「英語学習ポートフォリオワークショップ-学びの目標としてCan-doリストを考える」言語教育エキスポ2018ワークショップ JACET SIG 教育問題研究会主催, 早稲田大学, 2018年3月4日
- ② 清田洋一, 「外国語学習ポートフォリオの理論と実践 -自立した個人として世界に向き合う学び」明治学院大学, 教養教育センター主催 外国語教育に関わる研修会, 招待講演 2018年2月20日
- ③ 清田洋一, “Encouraging teachers’ autonomous professional development through using portfolios” (ポートフォリオを使用した自律的な教師教育), Japan-United States Teacher Education Consortium, ハワイ大学, 2017年9月16日
- ④ 清田洋一, 他1名「英語学習ポートフォリオの理論と実践 -課題解決型プロジェクト学習の試み」全国英語教育学会, 島根大学, 2017年8月19日
- ⑤ 清田洋一, 他5名「言語学習ポートフォリオの活用とその可能性 -それぞれの学校の学習状況に沿った取り組みから-」言語教育エキスポ2016 JACET SIG 教育問題研究会主催, 早稲田大学, 2016年3月6日

⑥ 清田洋一, 他 1 名「自律的な学習の継続を支援する言語学習ポートフォリオの取り組み」全国英語教育学会, 熊本大学, 2015 年 8 月 23 日

⑦ 清田洋一, 「英語教員のための省察的ツールの意義-J-POSTL の普及」言語教育エキスポ 2015 JACET SIG 教育問題研究会主催, 早稲田大学, 2015 年 3 月 15 日

⑧ 清田洋一, 他 1 名「英語教育における言語ポートフォリオの活用」全国英語教育学会, 徳島大学, 2014 年 8 月 9 日

〔図書〕(計 1 件)

『英語学習ポートフォリオの理論と実践 - 自立した学習者をめざして』

清田洋一, 編集および著者代表, 他 5 名, (共著, くろしお出版, 2017 年)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清田 洋一 (KIYOTA, YOICHI)

明星大学・教育学部・教授

研究者番号: 60513843

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

浅岡 千利世 (ASAOKA CHITOSE)

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号: 30296793

栗原 文子 (KURIHARA FUMIKO)

中央大学・商学部・教授

研究者番号: 60318920

(4) 研究協力者

木内 美穂 (KIUCHI MIHO)

東洋女子高校

鶴田 京子 (TSURUTA KYOKO)

川口市立県陽高等学校

斎藤 理一郎 (SAITO RIICHIRO)

群馬県立太田フレックス高等学校

福田 美紀 (FUKUDA MIKI)

筑波大学附属坂戸高等学校

松津 英恵 (MATSUZU HANAE)

東京学芸大学附属竹早中学校